

公衆栄養の現場を担う専門職による実践研究の意義と課題

たかはし のぞみ
高橋 希

千葉県健康福祉部健康づくり支援課

【はじめに】

現場では、常に対象者又対象地域に対して、実態把握、介入、評価のPDCAサイクルが日々、実践されている。それは、対象者との会話の積み重ねによる実態把握や評価だったり、業務の一環である事業による介入であったり。これらを実践する際に、「対象者のどれぐらいの人達が、〇〇の行動を起こしているのか」「今回の事業の方法は、適切だったのか」「この手法は、この事業に適切か」等多くの疑問が生じる。報告者は、保健所行政栄養士として現場で働き、そこで生じる悩み事に、専門職としてどう対応すべきか、その考え方や手法を学ぶべく女子栄養大学大学院修士課程に進学し、高度専門職業人養成としての実習と修士論文作成を行った。

本報告では、大学院進学中および修了後に実施した「実践研究」の概要を報告する。その上で、実践現場における専門職の立場から、実践研究における実際と課題を考察する。

【コンビニエンスストアを活用した食環境整備事業の評価】

平成18年度修士課程在学中に、農林水産省の補助事業によるコンビニエンスストアを活用した食事バランスガイド普及事業の企画、運営、評価に携わった。東京都A区において、地域ボランティア団体（高齢者）と、その地域を管轄する行政の協力を得て、食事バランスガイドを活用した弁当の企画・販売及び関連する講話が主な事業内容であった。この事業で「実践研究」として扱った課題は、「①コンビニエンスストアからの発信が、対象者にどのような変化をもたらしたか、②企業、行政、地域住民間でどのような連携が生じたのか」である。

これらの課題に対し、同区内の他ボランティア団体の協力を得て、比較群を設けた準実験デザインを設計した。又企業、行政関係者にグループインタビューを行った。結果、弁当の企画に関与した群で、食事バランスガイドの理解度や活用する自信、家族・友人と料理、栄養の話題をする頻度が有意に高くなった¹⁾。その背景として、企業側の弁当企画の場の提供、地域ボランティア団体リーダーによる仲間への声掛け、行政からの説明による参加に対する安心感があったことが、インタビュー結果から得られた。企業の企画に対して、地域ボランティア団体を動かすリーダーの存在、行政に対する信頼感が、本事業の連携に活かされたことが分かった。

【多職種による意見交換を促す手法の検討】

報告者が勤務する保健所において、保育所の食育計画づくり及び多職種連携の促進を目的とした研修会を開催。この研修会で、保育所に勤務する多職種間で考え方の共有を目指した。研修会という短時間の場で、職種の異なる参加者が意見交換に積極的に参加し、考えを共有するためには、適切な手法が必要になった。そこで、KJ法等で用いられている「カード法」を応用することとした。ここで生じた課題は、①本研修会において「カード法」は、目的達成に有効な手段だったのか？②使用の際の課題は？であった。しかしカード法に関する国内の先行研究は見つからなかった。そこで、研修会后、参加者へ郵送法による質問紙調査を実施した。自由記述による回答を分析した結果、カード法には「自分の考えが整理できる」「意見を出しやすい」「少数意見に気づく」といった3つの利点が明らかとなった²⁾。一方、「カードに意見を書けない」といった、「カード法」に慣れ

ない者に対する配慮が不足していたことから、今後の活用上の留意点が示唆された。

【市町村母子保健事業担当者の視点から把握した母子の心配事の実態把握】³⁾

厚生労働科学研究費補助金による「乳幼児健康診査の実施と評価ならびに多職種連携による母子保健指導の在り方の研究」に、行政栄養士の立場から携わった。本研究では、乳幼児健康診査時における栄養指導の留意点を整理したマニュアル作成に向け、栄養担当者が母子に対してどのような心配事を抱えているか?を把握することとした。全国1,742市町村の栄養指導担当者に対して、インターネット調査を実施し、母子の心配事を自由記述により尋ねる項目を含めた。分析は、質的分析の手法を用いた。自由記述から得られたデータは、妊娠期から乳幼児期併せて5,317件。このデータから、妊娠期では「健康状態及び体重増加量」、乳児期では「離乳食の進め方と食べ方」、幼児期では「偏食や遊び食べなどの食べ方」「間食の食べ方」が最も多い心配事の特徴として抽出された。

【多職種連携による対象者の実態把握】

平成27年度から千葉県富浦学園（児童養護施設）に勤務した。そこで、児童への介入計画を多職種と検討するため、児童を直接養育している児童指導員、保育士がどのような課題を抱えているか、グループインタビューにより把握することとした。質的分析法を応用し、カテゴリ化した結果、食支援に対して「偏食への対応」「食事づくりを教える」「食事マナーを教える」「美味しく食べる」、児童の心配事として、「朝食の食べ方」「偏食」「主食量」「甘い飲み物の飲み方」に関する発言が多くカテゴリ化された（本学会の第25回学術大会にて発表）。

【実践研究における実際と課題】

実践研究は、現場の今、目の前にある課題、また将来予測される課題から取組みが始まる。大学院で学んだことは、まずは先行研究を調べること。そこで解決しないなら、自分が調べること。研究結果を論文化することで、その成果は、社会で共有できるものとなる。

しかし実践研究は、研究の精度に限界を有する。報告者が、現場の業務を実践研究として取組む際に、精度を求め「研究」を追求してしまったことがある。しかし共に働く多職種から指摘が入り、事業の企画を目的から見直し、一からやり直したこともある。研究のための研究とならないよう、現場の声を聴く。「研究」と「実践」の調和が重要である。その調和のため、現場に足を運び、対象者や多職種に会い、対話する。一方で研究的な視点からの対話の機会として、多様な職種が集う本学会への参加の意義は大きい。論文投稿や学会参加を通じ、これからも実践研究の成果を社会に還元していきたい。

【謝辞】

大学院在籍時及び在籍後も御指導くださっている武見ゆかり先生及び、女子栄養大学食生態学研究室の皆様、日々御指導いただいている上司や同僚、事業や研究を進めるためお世話になりました多くの方に感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 高橋希, 今井具子, 武見ゆかり. 食環境整備における食品関連企業・行政・住民組織の連携とその意義 - 地域在住高齢者を対象とした食事バランスガイド普及啓発事業の事例から -. 日本健康教育学会誌. 2012;20:31-41.
- 2) 高橋希, 江崎潤子, 武見ゆかり他. 意見交換への参加を促す手法としてのカードを用いた手法の可能性 - 保育所職員を対象とした食育研修会での活用例から -. 日本健康教育学会誌. 2014;22(3):235-246.
- 3) 高橋希, 祓川摩麻, 新美志帆他. 市町村母子保健事業の栄養担当者の視点による母子の心配事: 妊娠期・乳児期・幼児期に関する栄養担当者の自由記述の分析. 公衆衛生雑誌. 2016;63(9):569-577.

【略歴】2002年 東京農業大学栄養科学科卒業

2002年 千葉県庁入庁

2008年 女子栄養大学大学院修士課程修了

(E-mail: n.sn2 @pref.chiba.lg.jp)